

気分をリラックスさせる香りトリフレッシュさせる香り 「スキンケア効果」があることを発見

資生堂は、気分をリラックスさせる香り（鎮静効果成分）やトリフレッシュさせる香り（高揚効果成分）に、肌の状態を改善する「スキンケア効果」があることを発見しました。鎮静効果成分である“ティーローズエレメント”（現代バラの花の香りに含まれる成分）には「皮膚バリア機能（※1）回復効果」を、高揚効果成分である“スターアニスエレメント”（八角ウイキョウの果実に含まれる成分）には「血色アップ効果」「皮膚温度の上昇効果」をそれぞれ確認しました。

資生堂は、1984年より香りの有用性を科学的に実証する研究「アロマコロジー研究」を進めており、これまでに香りの鎮静・高揚効果や交感神経活性化効果などを見出し、スキンケア化粧品やフレグランスなどに応用してきました。また1990年代には「肌と心のつながりに関する研究」を進め、香りが身体の心理的生理的效果に作用するだけでなく、肌の過剰皮脂を抑制する等の皮膚機能にまで及ぶことを明らかにしてきました。

今回の発見は、香りによる新しいスキンケア効果を実証したもので、資生堂は今後も香りの有益な効果を探求し、お客さまの化粧生活に役立てていきます。

<アロマコロジー研究の歴史>

- 1984年 アロマコロジー研究スタート
- 1984年 ①香りの鎮静・高揚効果
（香りの効果で気分がリラックスしたり、トリフレッシュする香りの働きを発見）
- 1994年 ②香りの不眠傾向緩和効果
（古代エジプトの香り「カイ」が不眠傾向者の睡眠改善に効果があることを発見）
- 1995年 ③香りのホメオスタシスへの影響
（香りが神経系・内分泌系を通じて生体の恒常性維持に重要な働きを持つことを発見）
- 2000年 ④香りの皮膚バリア機能回復促進効果
（ストレスにより抑制される皮膚のバリア機能の回復が香りによって促進されることを発見）
- 2002年 ⑤香りによる交感神経活性化効果
（グレープフルーツ、ペッパー、フェンネル、イストラゴンの香りの効果によって、交感神経が活性化し、中性脂肪を燃焼させる新スリミング理論を確立）
- 2002年 ⑥香りの皮脂抑制効果
（肌のべたつきやべたつきの原因である皮脂を抑制する香りの効果を発見）
- 2002年 ⑦香りが化粧品の使用性に影響
（香りが肌の重量感覚を変化させることを発見）
- 2002年 ⑧気分をリラックスさせる香りトリフレッシュさせる香りスキンケア効果

香りのスキンケア効果

資生堂は今回、香りのスキンケア効果（皮膚バリア機能回復、皮膚色、頬部皮膚温度）について20代の女性16名を対象に測定しました。

皮膚バリア機能回復率の測定では、被験者の前腕の皮膚バリアを実験的に壊し、さらに一定条件のストレス（カワードテスト※2）を与えた状況で香りを吸入してもらい、皮膚の水分蒸散量の変化を香りをかがない場合と比較しました。その結果、鎮静効果香料には、香りをかがない場合と比べて、皮膚のバリア機能回復促進効果が有意に確認されました（図1）。

また、皮膚色や皮膚温の変化を香りをかぐ前と比べて3時間後について比較したところ、高揚効果香料には、香りがかがない場合と比べて、皮膚色の赤みの増加と皮膚温の上昇が見られました(図 2,3)。この血色アップ効果によって、香りをかぐことで顔色を生き生きと健やかに見せることが実現できます。

※1 バリア機能…肌外部の悪影響から生体を守り、また生体にとって重要な物質が失われることのないようにする働き。

※2 カラーワードテスト…「あか、あお、みどり、きいろ」の4つの言葉を「赤、青、緑、黄色」の4色のインクを使ってランダムに印刷し、インクの色を60分間答えてもらうテスト。書かれている文字に惑わされてストレスを感じる。

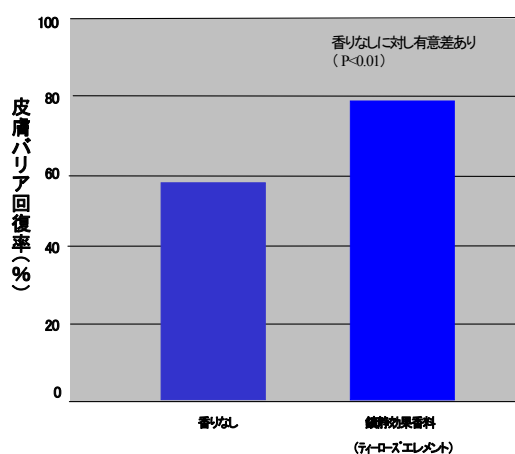


図1 鎮静効果香料(ティローズエレメント)による皮膚バリア機能回復

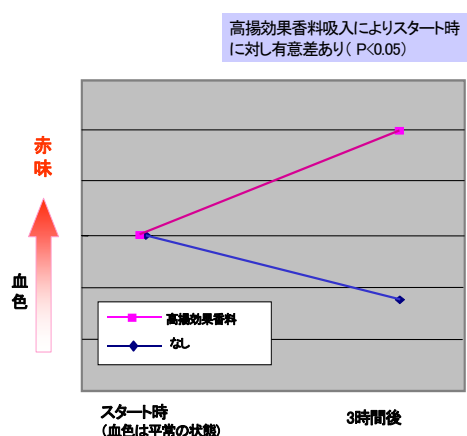


図2 高揚効果香料(スターアニスエレメント)吸入による頬部の血色アップ効果

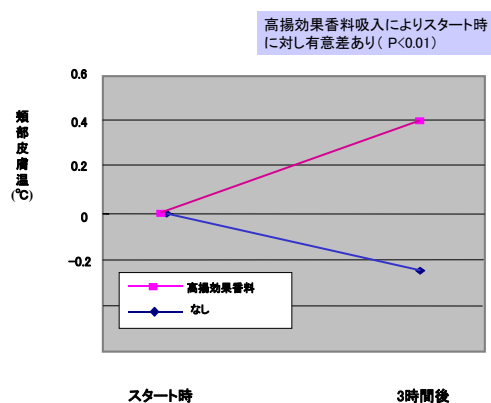


図3 高揚効果香料(スターアニスエレメント)吸入の頬部皮膚温上昇効果